中国の旧正月 ―春節―

首藤　美香子

春節を前にした中国の光景は――――家族や親戚への土産物でいっぱいに膨らんだビニール鞄を天井に山積みにして走るオンボロの長距離バス、車窓からのぞくのはわずかな賃金のための出稼ぎ労働からしばし解放されて呆けたような日焼け顔、あるいは故郷へとはやる気持ちを抑えきれず、小賢しく我先にと割り込む連中のせいで、絶えず列が乱れ怒号が飛び交う駅の切符売り場や空港の手荷物検査場、待合室ではこれからの長い旅路の空腹を満たすために、しゃがみこんでかきこむカップ麺からたちあがる化学調味料のしつこい匂い、他人のことなど気にも留めないような寛いだ格好で会話に熱中する人々の抑揚の強い中国語――――旧暦の正月を祝うために、首都北京から地方に向けてはじまる民族大移動

の一場面が真っ先に目に浮かぶ。それは、居合わせると不愉快で顔をそむけたくなる気分になるのに、こうやって想い起こすと、年に一度のハレの日を待ち望む人々のあまりにも素朴で率直なふるまいのあれこれに、いとおしささえ感じられる。

中国では、旧暦の正月を祝う春節は、労働節（五月一日）、国慶節（中華人民共和国建国記念日　十月一日）に並ぶ国民の休日だが、後者が政治的な意味合いを持つのに対し、春節は天体宇宙の原理と農耕民族の知恵に根ざした最も心躍る年中行事といえよう。一九一一年より導入された新暦の一月一日は今もって見向きもされないのに対して、短くて三日、長くて一、二週間も休める春節を前にすると人々はそわそわしはじめる。挨拶代わりに、「春節はどうするの、今年は親元に帰らないと」「どこか旅行に行きたいなあ」「今年はどういう順番で年始回りに行こうか」「景気が悪いけど会社からボーナス（紅包）はもらえるのかな」「年明けてみるとお払い箱になっていたらどうしよう」「春節見舞いを配り始めたぞ」などと尋ねあい、時に顔をほころばせ、声をはずませる。

「近年は暖冬続きでまったくしのぎやすいものだよ」と、たしかに北京人は慰めてくれるけれど、春節の時期は寒気が極まるころ。「今日はわりあいあったかいね」という時でも最高気温一、二度、内陸を吹き荒れる北風は足元からからだの芯をきりきりと凍らせ、空は不機嫌そうにずっと曇ったまま。そんな灰色一色のどんよりした世界を、ぱあっと明るく染め上げてくれるのが春節の飾りつけだ。映画「紅夢」でおなじみとなった真紅の派手な提灯がいたるところにぶらさげられ、門の左右両側には細長く切った赤い半紙に縁起のよい対句が書かれた「春聯（しゅんれん）」が貼られる。門扉や室内には、ころころと太った童子が花や魚、果物を手に戯れ遊ぶ姿が豊か

な彩色で木版された年画や、福が来るようにという願いをこめてわざと上下さかさまに貼られた「福」の字、干支をデザインした精巧な切り絵など、幸運の象徴といえる赤の装飾が一面を覆うころには、冬の厳しさも心細さもかき消され、お祭り気分がかきたてられる。

ここで、有名な天津にある楊柳青の年画を紹介してみよう。楊柳青の年画の美しさは、繊細で表情豊かな黒の摺り線に、紅・黄・緑・藍・紫が鮮やかに彩色されていることにある。年末になると次の年の「吉祥如意」「幸福生活」「家運隆盛」「富貴栄華」「高位出世」「子孫繁栄」を願って貼られる水印木版の年画は、民衆のために民衆によって量産されてきており、四大生産地のひとつ天津の楊柳青は明代中期から四百年の伝統を持つという。歴史故事、文学演劇、風俗時事、名所旧跡などさまざまな題材が選ばれてきたが、特に好まれてきたのは「子ども」

▲「福寿三多」

の図柄といえよう。

たとえば、「福寿三多」では、丸々とふくよかな童子三人が、佛手柑、桃、石榴を手にしている。佛手柑は、仏の様な「恵み深い人」の意味とそれが成育すると多数の指状に分岐することから「多福」の象徴とされる。一方、桃は刀（タオ）・逃（タオ）と同音であることから古くから悪魔除けの力を持つとされ、また桃源郷を象徴する樹木として永遠の生命や幸福を授けてくれる多寿・長寿の象徴、さらには実の形が邪気を払う姿＝女陰に類似していることから吉祥の植物とされてきた。最後に石榴はたくさんの実をつけることから多子豊穣の象徴とされてきた。これら三つの果物に「福多かれ」という人々の願いがこめられてきたのだった。

もうひとつ「五子奪蓮」は、元気な男の子達が蓮の実を奪い合っている絵図で、別名「五子奪魁」（子どもたちが首席を占める）とも呼ばれる。そこには、単に子孫繁栄のために男児誕生を願ってきた素朴な信仰心ではなく、「奪蓮」つまり科挙に連続して合格し、更に上級の職に就いて天下を取るほどに出世し、家名を上げてほしいという強い欲望のあらわれであった。まさしく高級官吏の輩出が一族の命運を分けるようになる明・清時代の社会情勢を反映した図柄といえるだろう。

さて、春節を祝う食べ物といえば、水餃子だろう。家族そろっての水餃子作りは、中国北方の人々にとって大晦日の楽しみな作業だ。冷蔵庫が普及した最近では、スーパーでも冷凍餃子が一年中売られているけれど、それぞれの家庭に伝わる味は大切に守られているように思われる。家事の手助けのために我が家に来てくれていた生粋の北京人、張学英さんの自慢は、腰は強いけれどちょうどいい厚みで、喉ごしのつるんとした餃子の皮と、安くて美味しいものを求め試作を重ねてあみ出される餡の種類の多

▲「五子奪蓮」

さだった。

普段でも餃子は主食だから作ってもらっていたけれど（なぜ日本人は餃子とご飯を一緒に食べたがるのかと、あきれられていたけれど）、春節前の彼女の張り切りようは特別だった。

「さあて、餡は何にしようかね、子どもたちの好きな三鮮（豚肉と干しえびと野菜）はいるだろう。白菜、キャベツ、しいたけ、木くらげもいいけど、いんげんや香菜を使ったのもなかなかいけるよ。羊肉とキュウリは私の一番の好物、変な顔しないで食べてごらん。いり卵とニラだけのもさっぱりしていいよ。そうそう○○は春雨を入れてほしいといっていたね、子どもたちも大きくなったことだし、一人で一度に二十個は最低食べるとして、豚ひき肉は何グラム、羊ひき肉は少なめにしとこうか。二百個くらい作って冷凍しておくかい。そうそう餃子粉は新しいのを一袋買ってこないと……」と、苦手な計算を

ちびた鉛筆をなめなめはじめる。

「春節前は食品の価格が暴騰するから参ったね、間違ってもスーパーで買い物したらだめだよ」「奥さんは自由市場の値段交渉は下手だから、他にいるものがあるなら今のうちにさっさとメモしておくれ」

「白菜とニラの残留農薬（特に水銀）の多さは相変わらずらしいよ、どんな野菜も水につけて毒をぬかないとね。全く手間がかかってしょうがない」と、いつもにましておしゃべりになる。

ここで張さんの餃子の作り方を紹介してみよう。まず餃子粉を水で練って寝かした後、ふくらんだ塊の中央に二本の親指を入れて、くるくる回しながらドーナツ状にする。五百円玉くらいの太さにまで細くし、輪っかを四等分して棒状にする。それを包丁でひと皮ぶんずつ均等に切り分ける。できた小さな塊に粉を十分に叩いたあと、手の平の付け根でぐいっと平らにし、真ん中をくぼませ、周囲を丹念に麺棒で伸ばし一ミリメートル程度の皮にする。ちょっと多いかなという量の餡をのせ、軽く握った両手に包んでくいっと力をこめると、自然にしわがより、まるで小船か冠のような馬蹄銀（昔の通過元宝）の形に整えられる。手品を見ているかのような指先の動きと、一分間に三十個近く餃子を作り上げる目の回るような早技に見入っていると、料理自慢の彼女の鼻が「ふん」とばかりますますふくらんでくる。

もともと満州族の食べ物であった餃子（ジャオズ）をなぜ大晦日に食べることとなったか、いろいろな説がある。たとえば、馬蹄銀に似た形の餃子を食べて金儲けを祈るためだとか、発音が同じ言葉「更年交子（ジャオズ）」と近く、新旧の年がかわって改まる意味が託されているためだとか。いずれにせよ、家族総出で餃子を作り食べることによって、血縁の結びつきをより強くし、互いの健康と幸福を願う気持ちをはぐくんでき

たのではないかと思う。

こうしてお腹いっぱい水餃子を食べ、日本の紅白歌合戦のような「春節聯歓晩会」というテレビ番組を見ているうちに、零時が近づくと、戦場にまぎれこんだかのようなパンパンと耳をつんざくような激しい炸裂音が鳴り始め、あたり一面煙でもうもうとしてくる。郊外では今でも、大人も子どもも狂喜乱舞して、闇夜を真昼のように照らす連発爆竹に興じ、そのいつ果てるともなく続く景気のよい音が祝祭気分をもりあげてくれる。赤い紙に包まれた小さなロケット型の火薬を大地に向かって次々とたたきつけ、両手で半分耳をふさぎながら足にあたらないようにパッと避ける。男の子達が、いい年をしたおじさん達が嬌声をあげ、競い合うように、まるで間が空いては興ざめとばかり鳴らし続ける爆竹をはじめて耳にしたときは、なんと乱暴な新年の迎え方だろうと驚き、その攻撃性に恐怖さえ覚えた。

たしかにそれは、厳粛な気分で除夜の鐘の音を聞き、来る年の平穏無事を祈る日本のお正月とは、まるで対照的だろう。大きな音とまばゆい光で大晦日に出るとされる悪鬼を追い払うために、あるいは竈神を先頭に下界に降臨してくる八百万の神を迎えるために鳴らされるという爆竹は、その民族学的な由来は別にして、歴史を通じて自然の脅威や圧政に耐えしのんできた人々の心を解き放ち、新たな困難にも前向きに立ち向かっていこうとする中国の民の強い意志のあらわれさえ感じられる。最近では、防火のため市の中心部での爆竹が禁止され、また資金難にあえぐ地方の学校では、授業もそこそこに子どもたちに花火や爆竹の製造をさせては、事故のために幼い命が奪われるといった話を聞く。けれども、胸のすくような春節の爆竹が、人々の心を励ます明るい音であり続けてほしいと思う。

（お茶の水女子大学）